

コミュニティ・スクール懇談会 第9回 12/19 (金) 開催

第9回目は、「個のやりがいとしてのコミュニティ・スクール」というテーマで懇談会を行いました。
関わる大人自身がどう楽しみ、やりがいを感じるかについて、議論や意見が交わされました。

「先生」ではなく「一人の大人」としての背中

子どもたちが出会うロールモデルとして、保護者や学校の先生以外の多様な生き方に触れることは、子どもたちにとって大きなプラスとなります。教えなきゃ！と構えず、大人自身が好きを追求する姿や、一緒に楽しんでいる姿を見せることは、子どもにとっても心を許せて温かい時間になるのではないのでしょうか。

・「教える」より「一緒に楽しむ」

囲碁教室の指導者の方は、「子どものためというより、自分が囲碁が好きで一緒に楽しむことを大切にしている。」とおっしゃっていた。教え込むのではなく、大人が子どもからパワーをもらうような感覚で関わるのが、お互いのやりがいにつながるのでは。

放課後に、地域の人と話せたり一緒に何か作ったりする学校の中の「公民館」のような穏やかな居場所になると良い。

公民館登録団体の活動に小中学生も一緒に参加させていただけるよう働きかけていく。

・自分の「特技」や「好き」を生かす

「お菓子作りが好きだから、一緒にクッキーを焼きながら中学生の話を聞きたい」といった、個人の趣味をそのまま持ち込むアイデアが出されました。無理に新しい企画を作るのではなく、今やっている活動や自分の趣味特技に子どもを迎え入れる形にすれば、住民も負担なく自分らしく関われるのではないか。

地域の人を巻き込むのは難しいが、「何でもよいから手伝って！」と漠然と周知するよりも「〇〇を教えてください！」とか「◇◇を手伝ってくれる方！」と具体的に募った方が来ていただける。

・大人の「楽しむ姿」が最高の教育

いろんな大人が「人生を楽しんでいる姿」を見せることが、子どもたちにとってのロールモデルになる。関わる人たちが自分のやりがいを感じて笑顔でいることが、結果として子どもたちの安心感や楽しみにもつながる。保護者や先生以外の大人の人に出会い、その人から何か興味があることややりたいことが見つけられる大切な場となる。

コミュニティ・スクールを「特別な活動」と構えず、村全体が子どもたちの居場所になるような、持続可能な仕組みをこれからもみんな考えていきましょう！